



●第2回ギャラリートーク開催

昨年からはまった「ギャラリートーク」。5～10分程度、作品や資料を手に、聴衆とこれ以上ない近さでやりとりできる、オープンなイベントです。

昨年は、デザインや建築の色彩設計、美術作品の色彩分析、色彩教材や教材、アプリ、さらには絵本まで、多岐にわたる16組の発表がありました。

学会発表の練習としてはもちろん、アイデア出しや新商品アンケートの場としても、(武田)ぜひ気軽にご活用ください！

●開催日時：2026年3月22日(日)

13時開場、13:30開会、

17:00終了予定、

17:30近隣で懇親会(希望者のみ)

●会場：DIC日本橋本社ビル 会議室

●参加費：色彩学会員：1,000円、

非学会員一般：3,000円、

色彩学会員学生・非会員学生：無料

●お支払い(3月12日〆切)

<https://color-science.jp/formmail/260322sankahi.html>

●参加登録(3月12日〆切)

<https://forms.gle/5qrSoVFYcL9k6cQr8>

(主査：山根千明)

●草木染めで緑色の綿糸を造る①

平安時代の延喜式縫殿寮にも記載されていた草木染めによる「深緑」「浅緑」など緑色の染色法を実践してみた。

延喜式には、「深緑」=藍と刈安の重染め「浅緑」=藍と黄檗の重染めと記載されておりますが、藍と刈安の重染めにチャレンジした結果、藍の色相が思ったより強くて刈安での重染めで黄色が中々乗り切れず、緑色への混色が結構難儀だった。藍染の時間や温度、刈安染液は量や煮出し温度、時間などの違いで濃淡液を作り、何日もかけようやく中彩度・中明度の緑色の綿糸に染め上げた。藍と刈安の重染めにより求める緑色の創出は非常にデリケートで難しい技術が必要だと理解出来た。当時官位制度や宮廷の一部衣装にしか用いられず、一般庶民生活に広まったのはずっと後世(江戸時代)になったのもうなずける。

(竹田 利明)



●大辞泉ひろいよみ 114ーし

紫檀：したん。マメ科の常緑小高木。淡黄色の花を多数つける。材は周辺部が白、周辺部が黒紅紫色で、木目が美しく堅いことから家具材として徴用される。インド南部の原産。

紫竹：しちく。イネ科の竹。高さ三～八メートル。茎は二年目から黒紫色に変わる。観賞用に栽培。黒竹。柴竹竹。

七彩：しちさい。七色。また。美しいいろどり。

七色：しちしょく。赤・橙・黄・緑・青・藍・堇(紫)の七種類の色。太陽光線をスペクトルで分けたときに見られる色。なないろ。

七赤：しちせき。九星の一。星では水星。方向では北。

視直径：しちよっけい。天体の見かけの直径を角度で表したものの。角直径。

漆黑：しっこく。黒うるしを塗ったように黒くてつやがあること。また、その色。

紫庭：してい。「紫」は天帝の座の紫微星の意。内裏。皇居。宮中。

紫泥：しでい。無釉薬で赤紫色または紫褐色の陶器。天青泥といわれる土を用いた、中国宜興窯のものが代表的。朱泥。

視点：視線の注がれるところ。物事を見たり考えたりする立場。観点。透視図法の一点。

*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)